

ダイテス領攻防記 6

登場人物紹介

トウザ

南の国ハヤサの
王太子。
マティサと
仲が良い。

トゥール

『無敗王』と呼ばれる
西の国
エチルの王。



水谷美有

みずたに みう
腐女子人生を謳歌していた
OL。事故で命を落とし、
ミリアーナとして転生。

ティス

ミリアーナと
マティサの息子。

ミリアーナ

辺境の地ダイテス領の公爵夫人。
BLをこよなく愛している。
快適な暮らしと萌えを求め、
オーバーテクノロジーで
異世界を改革中。

コシス

マティサの忠実な臣下。
クラリサと結婚し、
ダイテスの隣の領地
スエールの領主と
なった。

ラクス

クラリサと
コシスの息子。

クラリサ

ミリアーナの元侍女で、
今はティスの乳母を務める。
BL好きの貴腐人。

マティサ

オウミ王国の元王太子。
婿養子としてダイテスに
やって来て、公爵位を継いだ。
『黒の魔将軍』と
恐れられている。



目次

ダイテス領攻防記 6

家庭の事情

253

7

ダイテス領攻防記 6

プロローグ 誕生

その知らせは、あまりに意外なものだった。

「はい？ トウール様に子供が生まれた？」

一歳の長男ティスをあやしていたミリアーナは、黒い目を大きく見開いて驚きの表情を浮かべる。子供持ちとは思えないほど童顔なミリアーナ。彼女は言葉もなくして、婿マティサをじっと見つめた。オウミ王国の北の辺境に領地を持つダイテス公爵家は、四年前、一人娘のミリアーナに婿を取った。この婿マティサは、オウミ国王ユティアスの長子である。廃嫡されてダイテスにやってきたマティサはミリアーナと結婚し、二年ほど前に公爵位を継いだ。それと同時に、独立騎兵隊の隊長に就任。王都にとどまり、その役目を果たしている。

ミリアーナは王都でティスを生み、しばらくの間、そのまま養生していた。しかし領地のことを心配し、生後半年ほどの子供を連れてダイテスに戻ったのだ。

以降、なかなか領地に帰れないマティサのため、時おり王都のダイテス領館にティスとともに滞在している。その際には、侍女もとい乳母のクラリサと彼女の息子ラクスも同行する。

マティサの腹心コシスの子を宿して、彼と婚姻したクラリサ。クラリサは、ミリアーナよりも六日早く男の子を出産した。以降、ラクスと名付けた息子と、ミリアーナの息子ティスを育てている。いわゆる乳母である。

その日、クラリサたちとともに王都の領館を訪れたミリアーナは、マティサの帰宅を待ちながら、居間で長男とくつろいでいた。

一方、勤めを終えて戻ってきたマティサは、腹心のコシス・カティラ、家令のナシエル・オーガス、その他子飼いの密偵を集めて、何やら相談をはじめた。その後、マティサは彼らを連れて居間に現れ、ミリアーナに衝撃の情報を伝えたのである。

オウミの西に位置する大国エチル。彼の国の慈悲深き『無敗王』トウールに、子供が生まれたという。

硬直して動きを止めたミリアーナを不思議がり、ティスは「うあ？」と首を傾げた。

ややあってミリアーナは我に返り、マティサに尋ねる。

「トウ、トウール様って、独身よね？ てゆーか、ルーファス君を王にするため、子供も作らないし、妻も娶らないって言ってたわよね？」

「……そうなんだがな……」

マティサは、華やかな美貌を歪めて唸った。

トウールは、エチル前王の末の弟にあたる。民をまるで顧みなかった前王は、己の欲望のみを迫

求して国を疲弊ひへいさせた。この愚かな前王と戦い、討ち倒したのがトゥールである。

その後、王となったトゥールは生き残った兄の子ルーファスを養子にして、王太子に据えた。民のために兄王を討ったが、それはトゥールにとって本意ではなかった。王位は、いずれ本来の血筋に戻さなくてはならない。しかし自身に子がいてはそれが難しいと考え、生涯独身を誓ったのである。

そしてトゥールは誓いを守り今日まで独身だったが——突然、実子が生まれたことを発表。トゥールの子を生んだ人物については公おおびになっていない。

これに驚いた各国は、情報を集めようと奔走ほんそうしているらしい。

ダイテスは、オウミを取り巻く三国——エチル、ハヤサ、カイナンに独自の伝手つてを持つ。オウミ王家を飛び越え、直に流れてくる情報があるのだ。その伝手により、ダイテスはトゥールの子を生んだ人物の情報をエチルから得た。

密偵の一人であるセイが、ミリアーナの疑問に答える。

「トゥール陛下は、結婚してないっすよ。寵愛ちやうあいしてる女性が娘を生んだんで、自分の子だと認めたくす。エチルと連絡取り合ってるダイテスには、詳しいことを教えてくれたっすよ」

まったく特徴のない顔をしたこの青年は、やや長身で細身に見える。しかし実はかなりの凄腕すじうでで、エチル方面の交渉を担当している。

セイは声を潜ひそめて、エチルからもたらされた情報をミリアーナに伝えた。

「これは、ここだけの話っすよ。トゥール陛下の御子を生んだのはヒナキさんっす」

しかし、ミリアーナは首を傾なげた。『ヒナキ』という名に心当たりはない。

「誰？」

「え？」

セイが面食めんじらった。また、もう一人の密偵カズル・ツナガも眉をひそめる。

「は？」

一方、マティサの麗うるわしき腹心ふくしんコシスは、何かに気づいたらしい。

「あ」

同時に、マティサも納得したように口を開く。

「そういえば、嫁はあの時いなかっただから会ってないな」

後に南の中堅国ハヤサが参加して四ヶ国同盟となった、エチル、オウミ、カイナンの三国同盟。公式にはエチルのトゥール王が発案したことになっているが、実はダイテスが裏で手を回し、同盟を持ちかけた。

当時のオウミは、エチルに戦争を仕掛けて大敗し、死に体たいであった。その起死回生きしかんせいの一手こそ、三国同盟である。

しかし、こちらから戦争を仕掛けた西の大国エチル、長年の仇敵きゆうてきである東の大国カイナンに、ただで同盟を結ぼうと持ちかけても一蹴いっしょくされるだけ。そこで、ダイテス公爵家は二つの対価を支

払った。

一つは、ダイテス独自の農法。これは、前世の記憶を持つミリアーナがダイテスにもたらしたものである。

ミリアーナの前世は、水谷美有という平凡なOLだった。平和な日本という国で生まれ育ち、不慮の事故で命を落としたのだ。

腐女子だった美有は、歴史になみなみならぬ興味を持ち、また小説の執筆を趣味としていた。架空の歴史小説を書くには、さまざまな知識が必要となる。そしてこの世界に転生した彼女は、前世で吸収したあらゆる知識をたやすく思い出すことができた。

ミリアーナは、機械のない世界でも活用できる前世の農法を、エチルとカイナンにも提供したのである。

そして、同盟のために支払ったもう一つの対価。それは、ダイテスに捕らえられていた各国の密偵たちだ。

ダイテスのセタ城のセキュリティシステムは、ミリアーナの前世の知識を活用したもので、他国の密偵たちが多数これにかかった。そのうち、エチルとカイナンの密偵たちを祖国に帰すことにしたのだ。

彼らを受け渡す際、エチルが差し向けたのが、密偵全員の顔を見知っているヒナキである。しかし、ミリアーナはこの確認の場に同席していなかったため、ヒナキとは顔を合わせていない。

また、当時は祖国のランカナにいたナシエルも心当たりがないらしく、首を傾げて尋ねた。

「そのヒナキさんとは、どなたです？ 寡聞にして知らないのですが」

ナシエルは三国同盟が結ばれた後、オウミに喧嘩を売った西南の国ランカナの出身である。オウミ、カイナン、ハヤサの連合軍に攻め込まれてランカナは降伏。地位も身分も職も失ったナシエルだったが、その腕を買われてマティサがダイテスに引つ張ってきた。今は、王都のダイテス領館を取り仕切る家令として手腕を振るっている。

セイは、ヒナキについて説明した。

「そういえば、知らなくても仕方ないっすよね。ヒナキさんは裏の人間っすから。エチルの密偵組織の長だった人で、『傾国のヒナキ』って二つ名を持ってたんす」

「影、ですか!? そういう立場の人間が王の子を生むとは……」
驚愕するナシエルに、セイがほつりとこぼす。

「ヒナキさん、がんばったっすね」

「うむ。あの『無敗王』殿の決意を覆したのだからな。並みの努力ではないぞ、快挙だ」
密偵の一人であるカズルもまた、ヒナキを褒め称える。

「いえ、そういうことではなく……影が王に懸想するとか……」
あり得ないことではないかとナシエルが唸った。

「そんなことないっすよ。トゥール王が望めば、嬉々として傍に侍る人間は少なくないっす」

「彼の長は、『無敗王』殿を心から慕っていたよ。まあ、エチルでは珍しくもないがね」
密偵二人はそう断言した。

ミリアーナが感慨深く言う。

「愛されているものね、トゥール様」

エチルの麗しき王トゥールは、男女問わず愛されている。敬愛というより、もはや崇拜の域だ。
「で、そのヒナキさんって、どんな人？」

ミリアーナが尋ねると、セイが即答した。

「トゥール様至上主義です」

「エチルでは珍しくないわね」

カズルが苦笑して言い添える。

「気の強い女性だよ。長を務めるだけあって頭も悪くない。見た目はこんな感じかな？」

その言葉の後、カズルの傍らに一人の女性が現れた。

渦を巻く金の髪、長い睫毛に縁取られた碧眼。清廉さと妖艶さを兼ね備えた美貌の持ち主で、背が高い。セイやカズルも着用している、いわゆる忍び装束に包まれた体は、柔らかな曲線を描いていた。

むろんこれは実物ではない。ダイテスの密偵『亡国のカズル』が見せる幻術だ。

この世界には魔力があふれており、それを宿した人間は“加護持ち”と呼ばれる。精神に魔力を

宿し、不思議を操る者は魔術師という。

カズルは、幻影を生み出すことのできる魔術師である。普段は黒蝶や鴉を使役して情報を収集するが、その気になればこんな芸当もできる。

「立体映像……」

ミリアーナは思わず吹き、カズルが作り出した実物大のヒナキをまじまじと眺めた。

「美人さんね。この人とトゥール様の娘だったら、将来、絶対美人になるわ」

ミリアーナは、ほうつと溜息をつく。

トゥールもまた、月の精のような清らかな美貌の持ち主である。父と母、どちらに似ても美人になることは間違いないだろう。

『傾国』の二つ名は、伊達ではないからねえ」

そう言うと、カズルは幻影を消した。

ミリアーナと密偵たちのやりとりを静かに聞いていたマティサは、顎に手をあてて唸る。

「だが、まずいことになった……西が荒れるぞ」

慈悲深きトゥール王は肉体に加護を持ち、王になれるほどの強大な力がある王級“加護持ち”だ。戦をすれば負け知らず、『無敗王』として名を馳せている。しかし、トゥールは無駄な争いを嫌う。故なく他国を攻めれば、『無敗王』自ら出陣して正しき国を救い、非のある国を悪と見極め断罪する。

西の国々は『無敗王』の制裁を恐れて全力で戦争を回避し、穏やかな付き合いを続けていた。だがここでエチルの内政が揺らげば、混乱に乗じて私利私欲に走る者が出てくるだろう。

養子である王太子ルーファスト、トゥールの実子である姫君。それぞれを担ぎ出し、勝手に争う者たちが――

下手をすれば、国家間の陰謀にも繋がるだろう。良くも悪くも、エチルの影響力は大きいのだ。「どうするかな……」

マティサは思案した。

しかしエチルの上層部も馬鹿ではない。これらのことはおそらく想定済みで、密偵組織も動くはず。

エチルのことだ、自力で事態をおさめられるだろうが、ただ静観しているのも苛立つ。ダイテス公爵家にできることといえば――

「カズル、エチルに行け」

マティサはカズルに命じた。

カズルは片方の口を上げて笑う。

「主様の思惑は？」

「無敗王の支援。エチルの影が動くだろう、その協力だ」

ダイテスの密偵の中で、手練れといえばセイとカズルである。

戦闘力自体は、肉体に軽い加護を持つセイのほうが上だが、諜報なら幻術使いのカズルが上だ。

カズルは企てを察知し、調べ上げるのに向いている。

「期限は、事がおさまるまでだ。できるな？」

「承知」

カズルは、主の命を受諾した。一方、ミアアーナは洗面を作る。

「まった、面倒なことを……」

ミアアーナは、カズルに向かって命じた。

「カズルさん、長い任務になるのなら、リオちゃんに手紙を書いていきなさい！ ただでさえ長いことダイテスに帰ってないでしょう！」

リオは、カズルがカイナンで拾ってきた子供である。現在十四歳の少女だが――ミアアーナと同じ前世の記憶を持つ。リオの前世は、日本で暮らす二十二歳のOL、潮梨緒だった。

普段はカズルの屋敷で暮らしており、カズルがいない時にはセタ城で預かっている。

仕事中毒のカズルは、任務で長期家をあけることも多い。

カズルを慕っているリオを、ミアアーナは哀れんだ。

カズルは、ミアアーナの命に頷く。

「では、そのように。まあ、いつ帰れるかはわかりませぬし、あちらに行けば手紙も出させぬからな。心苦しく思うのですが、セタ城なら間違いがない」

セタ城のセキュリティは万全である。リオを安心して任せられると、カズルは言う。

ミリアーナはぼやいた。

「まったく、本当に面倒よね。手っ取り早い方法もあるけど、トゥール様はやるかしら？」

「嫁、手っ取り早い方法は時に乱暴になるぞ」

マティサは眉を寄せる。

お家騒動は、神輿が二つあるからこそ生じる。この神輿を一つにしてしまえばいいのだが、それは時に乱暴な手段にも繋がってしまう。

しかしミリアーナは、事もなげに言葉を続けた。

「乱暴でない方法もあるわよ？ ルーフアス君がトゥール様の実子と結婚すればいいのよ」

「は？」

マティサは目を丸くした。

「トゥール様の子供、女の子なんでしょう？ ルーフアス君の従妹にあたるんだから、ありよね？」

ルーフアスは、トゥールの実子ではない。実際には甥にあたり、このたび生まれた姫とは、従兄妹同士となる。それなら婚姻も可能だ。

トゥールがルーフアスに王位を譲れば、いずれルーフアスと姫の子供が王座につくことになるだろう。すなわち、トゥールの血を引く者に王位を渡したいというルーフアスの願いも叶えられる。

「ね？ 問題ないでしょう？」

「その手があったか……」

血なまぐさい方法にばかり気を取られていたマティサが呻いた。

一方、セイは慌てて口を挟む。

「いやいやいや、問題あるっすよ！ 相手は生まれたばかりなんすよ！ いくらなんでも、ルーフアス殿下が気の毒っす！」

ルーフアスは、ミリアーナと同じ二十二歳。少し考えこんだミリアーナは、首を傾げた。

「そんなにおかしい？」

「まあ、小生とリオほど離れておりません」

苦笑するカズルを、ミリアーナはじっと見つめる。彼が言いたいのは、親子ほどに年が離れているということなのだろうが――

三十代半ばほどに見えるカズル。

背が高く、引き締まった体つきをしている。黒髪に黒い瞳、知的で端正な顔立ち、整えられた口髭。

一言で表すと、カズルはダンディなおジサマだ。

大人の渋みがある男前。

ミリアーナは、ダイテスのセタ城にいるリオを思い浮かべた。

茶色のふわふわした髪と茶色の瞳に、可愛い顔立ち。

十四歳となり思春期を迎えたりオは、背も伸びて女の子らしくなった。ダイテスに来たばかりの頃の、痩せ細った面影はない。

また、カイナン人としての特徴が如実に表れはじめていた——胸のあたりに。

ミリアーナは一つ頷き、親指を立てた。

「全然オツケー！ 問題なし！」

「どっちの組み合わせが!？」

男たちは驚愕した。ルーファスの話なのか、カズルの話なのか……

「えくだって、政略結婚だったら、考えられる年の差よねえ？」

ミリアーナは、男たちからそっと視線を外す。

「ええ、まあ、王侯貴族ならありうる年の差ですが……」

上級貴族だったナシエルは、半目で口を開く。

眼鏡の奥の碧眼は、ミリアーナを疑っていた。ルーファスの件に限らず、別の意図があるのだろうと。

元王族のマティサは、そもそも婚姻とは国の都合で結ぶものだと考えている。そのため、ミリアーナの案に異を唱えなかった。

一方のコシスは——かつての自分とクラリサの置かれた状況を思い出し、なんとなくミリアーナの意図を察した。

ミリアーナの侍女クラリサと結婚して一児をもうけたコシスだが、どうもミリアーナに外堀を埋められた気がしてならない。

額を押さえて息を吐いたが——語ろうとはしなかった。

人生には、時に諦めも必要なのである。

「大丈夫よ！ この世界で、ロリコンは犯罪じゃないわ！」

「ろ、ろりこん？ なんのことでございましょうや？」

目を白黒させるカズルに、ミリアーナは笑みを向ける。

この世界では、寿命が五、六十年ほど。そのため若いうちから結婚し、子作りするのが普通である。

女性の婚期は十五〜十八歳頃だが、王族や上級貴族の中には、生まれてすぐに婚約者が決められたり、十になるかならないかで結婚したりすることもある。

微笑むミリアーナに、カズルは苦笑を浮かべた。

「……何を言いたいのかよくわかりませぬが……小生は幼い子供に興味はありません」

ロリコンの意味を知らないカズルだが、会話の流れからして、そうではないかとあたりをつけた。すると、ミリアーナが不思議そうに尋ねる。

「枯れちゃってるわけじゃないでしょう？ それとも、もう引退してるの？」

「……そういうわけではございませぬが……」

カズルは顔を引きつらせた。

「それならいいじゃない。男は三十でも四十でも、まだ子供を作れるし。幼な妻幼妻に何か問題が？」

「……お方様かたさま、それはルーファス殿下のことです？」

カズルに問われ、ミリアーナは視線をさまよわせた。

「もちろんよ」

「……お方様、なぜ目を逸そらされるのですかな？」

「たまたまよ！」

ミリアーナは言い張った。

呆れたようにセイが言う。

「ルーファス殿下とは別の件について話してするように聞こえるのは、俺だけっすか？」

「気にするな……世の中には知らないほうがいいこともある」

マティサの言葉の後、コシスはしばらく考えてからカズルに助言した。

「カズル殿、諦めは必ずしも不幸とは限りませぬ」

「何を諦めると……」

嫌な予感として、カズルは呻うないた。

何か厄介ごとが降りかかってくる気があるのだが、それがなんなのか、カズルにはわからなかった。

「まあ、何事も一步を踏み出す勇気が必要よね」

「ですから、何に対しての一步かと……」

ミリアーナに尋ねるカズルだったが、それは秘密だ。

とその時、扉の外から声がかげられた。

「主様あかひさま、お客様がお見えますが、いかがいたしましたでしょうか？」

使用人の一人が来客を告げる。

「客？ 誰だ？」

眉を寄せてマティサが尋ねると、使用人は扉の外から答えた。

「ハヤサのトウザ殿下です」

「……通していいぞ」

「では、小生しょうせいはこれにて」

ダイテスの影であるカズルは、早々に引っこむことにした。

セイも、それにならう。

オウミの南に位置する国ハヤサ。その国の王太子トウザには、カズルもセイもすでに存在が知られている。しかし、気安く顔を合わせるわけにはいかない相手だ。

密偵二人が辞してすぐ、客人は居間に通された。

お忍びのためか、水夫のような格好をしたトウザは満面の笑みで友に声をかけた。

「久しぶりだな、マティサ」

「そうだな。珍しくハヤサに長くいたそうだが、急に退屈の虫でも騒いだか？」

マティサはかねてよりトウザと親しくしており、気の置けない仲である。マティサがそう尋ねれば、トウザは「まあな」と笑う。

トウザには放浪癖があり、自国で長く過ごすことはとても珍しい。しかしこの数ヶ月、珍しくハヤサから出なかったと聞いている。

「まあ、ちょうどいい。聞いたか？ 『無敗王』の話を」

マティサが話を変えると、トウザは頷いた。

「おお、うちの密偵が遠い目をしてたぜ」

ハヤサのほうでも、すでに情報を掴んでいるようだ。

トウザが苦笑して口を開く。

「西が荒れるな」

「ああ。ハヤサは、何か手を打つか？」

ハヤサのナリス王は、さまざまな企みを得意としている。

トウザが素直に答えてくれるとは思わなかったが、反応によって見えるものもある。

マティサの問いかけに、トウザは肩をすくめた。

「うちはしばらく静観だ。親父は手を出すまでもねえって言うし、こっちは正直それどころじゃね

えんでな」

トウザが西の話をしに来たのだと考えていたマティサは、訝しげに尋ねた。

「何があった？」

「ああ、実は大事な話があるんだ」

そうして南の海洋国の王太子は、特大の爆弾を落とす。

「俺に娘が生まれたんだ。お前んとこの息子の嫁にしてくんねえか？」

第一章 成約と代償

ハヤサの王子トウザの申し出は、突然のものであった。
ミリアーナは息子のテイスを抱きしめ、しばし硬直して――

「政略結婚キターッ！ てゆーか、トウザ殿下、いつの間に結婚したのよ！ 独身だったじゃな
しー！」

「結婚してねーよ！」

ミリアーナの叫びに、トウザはきつぱりと言い放つ。

確かに、ハヤサの王級「加護持ち」である『ハヤサの鬼』トウザが結婚したなら、その話がオウ
ミに伝わっていないはずがない。

「じゃあ、女を囲って子供ませたんですか？」

非難の目を向けるミリアーナに、トウザは困ったような顔をした。

「ちよいと、わけアリでね」

トウザは自分の胸を親指でとんと示し、言葉続ける。

「ここんとこ、やられててな。表に出せねえんだよ」



ハヤサの王太子であるトウザ。父王のナリスは亡妻を忘れられず、新たな妻を娶ろうとしない。ハヤサの王妃の座はいまだ空位である。

そのため、トウザと正式な婚姻を結ぶ相手には、ハヤサ王妃の役割も求められる。それなりの身分や能力が必要となるだろう。

しかしトウザが選んだ相手は、そのいずれも満たすことができず、心を病んでいるという。

「……王太子妃にはできない相手か……」

マティサは顔をしかめ、ミリアーナに向かって言う。

「嫁、こいつに隠し子がいたとしても、俺は驚かんぞ」

トウザは、どちらかといえば女好きである。ならば庶子の一人や二人、いても不思議ではない。

「マティサ、お前、実はかなり動揺しているだろう？」

友の問いかけに、マティサは眉を寄せた。

「子が生まれたことには驚いていない。ただ、持ってきた話には動揺している」

たとえ正妃の子ではないにしろ、トウザが『自分の娘』と認めたのなら、その子はハヤサの王族である。そして王族の娘を、他国の公爵家に嫁がせたいと言っているのだ。気安く了承できるわけがない。

「オウミの王太子とハヤサの第二王女は、婚姻したばかりだろう。この状況で、わざわざオウミの公爵家とさらに縁を結ぼうとする意味がわからない」

国の規模としては中堅とされるハヤサだが、良港を持ち、交易により栄えている。さらには『虐殺人形』ナリス、『ハヤサの鬼』トウザと二人の王級「加護持ち」を擁し、軍勢力も高い。そのため、ハヤサとの縁を望む国は多い。

「ナリス王は何を考えている？」

マティサが鋭く問いかけると、トウザは頭を掻き、溜息をついて告げた。

「親父じゃねえよ、俺の意向だ」

年が近く、ともに王級「加護持ち」であるマティサとトウザは、仲が良い。裏でさまざまな計を巡らせているナリスとは違い、トウザは一本気なところがある。

「あれだな、娘ってえのは、誰にもやりたくねえもんだな。娘が生まれて、はじめて親父の気持ちが変わったぜ。妹ん時に、そういう気持ちはなくもなかったけどよ、娘は格別だ」

三人の妹を持つトウザは、苦笑する。

「すまん、トウザ。俺は男兄弟しかいないから全然わからん」

マティサの兄弟は、第一人である。いとこも男ばかりなので、血縁の女性を嫁に出すという気持ちが理解できなかった。

トウザは、「そっか」と笑って続ける。

「女は、いつか嫁に出さなきゃならねえ。やるんなら、信用の置けるところがいい。お前んとこなら、親父も文句はなかったぜ」

「お前の長子なら、ハヤサの跡継ぎ候補だろうが」

「いや、男ならともかく女だからな。これからだって子はできるだろうし、男ができなきゃ、弟んとこの子を養子にもらやあいい」

トウザの上の弟センザは、ハヤサ国内の貴族の娘を嫁にもらい、臣下となった。下の弟はまだ独身だが、いずれ国内の貴族の中から伴侶を選ぶ予定だ。

ハヤサは若い国なので、国内の勢力をすべて掌握できていない。そのため、王子たちを国内の有力貴族と縁組させることで、関係強化を図っているのだ。一方、二人の王女は国外に嫁ぎ、他国の絆も深めている。

ミリアーナは動揺しつつ、トウザの申し出に異を唱えた。

「えっと、もったいないくらいの良いお話ですが、うちのような辺境の貴族に他国のお姫様が降嫁するなんて、無茶ですわ。婿様は王族の出ですけど、うちは一貴族なのですよ」

一公爵家が、王族をすっ飛ばして他国の王族と縁を結ぶわけにはいかない。

オウミのジュリアス王太子をおびやかす存在として、魔王太子のマティサは、一部の者たちから目を付けられていた。公爵位を継いだ後も、マティサは彼らから危険視されている。ここで王家を無視して他国と繋がるものなら、厄介なことになりかねない。

「王族だったって、親父の代でのし上がっただけのにわか王族だぜ、うちは。んな気にするようなもんじゃねえよ」

トウザは、ハヤサ王家の威光を否定する。

「……お前ら、自分の祖を忘れてねえか？」

ミリアーナとトウザの言い分を聞いたマティサは、苦々しく唸った。

「え？」

「は？」

ミリアーナとトウザは、ぼかんと口を開ける。

何もわかっていない二人に、マティサが再び唸った。

「嫁、ダイテスは公爵家！ その血をさかのぼれば、オウミ王家にあたる！」

マティサは、まずミリアーナの考え違いから直す。ダイテス公爵家の初代は紛れもなく王族であり、その血はミリアーナにも受け継がれている。

ぼんつとミリアーナが手を叩いた。

「そういえば、そうでした！ 初代は、政権争いに敗れた王族でした！」

「忘れるな！ 嫁も立派に高貴な生まれだ！」

ダイテスは公爵家。その祖は、オウミ王家なのである。

しかし政権争いに敗れたため、辺境の地に追いやられた。その後は本家ともいえる王家を刺激しないよう、政治的に影響を与えない弱小貴族とばかり縁を結んできた。高貴な生まれだという自覚など、とつくに忘れ去られている。

ミリアーナは、マティサから視線を外して力なく笑った。

「だって、婿様、立派な生まれなのは初代だけで、代々、力のない家とばかり婚姻してきたんですよ？ 王族に連なっているなんて、忘れちゃいます」

「忘れるな！ 先祖を粗末にするなー！」

憤るマティサに、今度はトウザが訝しげな表情で尋ねた。

「マティサ。元をたどれば、ハヤサは一豪族。そこから力をつけて優遇されただけの家だぜ？」

「お前も、モグワール王家の血を継いでいるだろうが！ 最後の王の甥だぞ、お前は！」

トウザは目を丸くした。

トウザの父ナリスはモグワール王の弟であり、入り婿だ。愛する妻オクタヴィアをモグワール王家に殺され、王家を討ち滅ぼしてハヤサを建国したのである。

「おおおお、そう言えば、アレ、第五王子だった！」

「自分の父親をアレとか言うなー！」

トウザには、紛れもなくモグワール王家の血が流れている。

「いや、俺ってば、ハヤサの人間って意識が強くてよ。モグワールのほうまでは意識してなかったというか、アレらと血が繋がっていると考えたくなかったというか……」

頭をがりがり掻きながら言うトウザに、マティサは突っ込む。

「後者だな。絶対、後者だろう」

モグワール王家の腐敗ぶりは、国外でも有名だった。トウザにとって、モグワール王家の思想は忌避するものであったのだろう。

「王族っていう身分が問題なら、うちの分家——ソウマの家あたりの養女にしてから嫁がせるってのはどうだ？ そんなら問題ねえだろ」

ソウマは、トウザの遠縁の親戚である。トウザより十ばかり年上で、初陣の頃から彼の右腕として仕えている。

確かにそれならば問題ないが、マティサは懸念を抱いた。

「……どうしてそうまでしてダイテスと縁組したがる？ お前の子なら、国内外を問わず、よりどりみどりだろうが」

「あん？ そりゃあ仕方ねえ。うちにとっちゃあ、オウミ王家よりダイテス公爵家のほうが重いんだよ。評価が引っくり返ってる」

「なんだと!？」

トウザの即答に、マティサは驚く。

マティサは、自身と繋がりを作ることで、ハヤサがオウミと友好を深めようとしているのかと考えていた。

「不思議じゃねえだろ？ ダイテスがハヤサに提供したものを考えろや。親父をはじめ、うちの連中は目の色変えたぜ」

不敵に笑うトウザ。マテイサは、思わずミリアーナに非難の目を向けた。

ミリアーナはティスを抱えたまま後ろを向く。

（すみません、すみません。ハヤサに、天測航法、羅針盤、海図の製作方法、壊血病の情報を教えたのは私です！ だって、海苔と鰹節を作ってもらったための条件だったんだもん！ でも婿様だって、許可してくれましたよね？）

海苔と鰹節の生産については、原料の確保から加工までのすべてをハヤサに丸投げしている。特に鰹節は、原料になりそうな魚の選択まで任せた。

いくつもの過程を経て作られる海苔と鰹節だが、販売相手はミリアーナたちのみ。きちんと報酬を提示しなければ、まず断られそうな取引である。

そこでミリアーナは、マテイサの許可をもらい、思い切った報酬を渡すことにした。

一つは、天測航法。

この世界にも、動かぬ星というものがある。地軸の延長線上に光る極星のことだ。己の現在地を見失った旅人は、この星を道標に旅したという。

ミリアーナがハヤサに伝えたのは、この極星を用いた航法である。空に見えるいくつかの天体と水平線の角度を計測して、現在の位置をはじき出すのだ。

むろん、元の世界とこちらの世界の天体が同じとは限らない。かつてミリアーナは、この技術を確立させるべく、ダイテス領の防衛長官エドアルド・アムールに相談した。

頭を抱えたエドアルドは、天体の研究を行っている学者をセタ城に招いた。そして検証と実験を重ね、こちらの世界でも通用するように修正。こうしてプロトタイプの完成までに五年を費やし、今なお検証中である。

マテイサとコシスはこの技術をはじめて知った時、二人そろって驚いた。

天測は、地上でも応用がきく。慣れぬ土地で迷った際、現在位置を知る方法があれば、帰還率が跳ね上がる。マテイサとコシスも、一時期、この技術の習得に力を入れていた。

船乗りなら、誰もが飛びつく天測航法。ミリアーナはこれとともに、ある道具もハヤサに渡すことにした。それは、進むべき方向を示してくれる羅針盤である。この二つは、航海の命綱となりうるものだ。

また海のないダイテスで、海図の製作方法を知っていてもさほど役に立たない。ハヤサのほうが無効活用してくれるだろう。

こうしてミリアーナは、天測航法、羅針盤、海図の製作方法をハヤサに提供した。その際、他国に情報を流出させないことと、航海記録の写しをダイテスにも提出することを条件に入れている。

長期の航海で病気にかららないよう、おまけに壊血病の情報も付けた。壊血病とは、ビタミンCの欠乏により生じる病気で、死に至ることもある。

ミリアーナの提供したものの価値は、何も知らない者にとっては、その真価がわからないだろう。しかし、ハヤサの人間は価値を理解できる者ばかりだった。

トウザは、にやりとした笑みを浮かべてマティサとミリアーナに言う。

「な？ 親父に、この縁談を何がんばりでもまとめてこいって送り出されたぜ、俺は」

「…………お前の事情はよくわかった……」

この話をまとめないで、トウザは帰れないらしい。

マティサは妥協することにした。

「お互い子はまだ生まれたばかりだ。今日のところは、世間話ついでに、口約束での婚約という形にしないか？ 時間を置いて、諸々の問題を解決していかねばならん」

マティサとトウザの間でこのような話が出たことについて、他国はもちろん、オウミ王家に知られるのはまずい。

マティサに反感を持つ者たちから、無い腹を探られる可能性もある。

とはいえ、子供たちはまだ赤ん坊。十数年の猶予があれば、その間にいろいろな問題を解決できるだろう。

「婚約、それって問題の先送りなのでは？」

「嫁、それは言うな」

かくして、内々の口約束ではあるが、ダイテス公爵子息ティスと、ハヤサ王家の姫君は婚約する運びとなった。

「十何年後のことだけだよ、娘を頼まあ」

トウザは朗らかに笑う。

「どうしよう。十数年後、トウザ殿下の女版みたいなお嫁さんが来ちゃったら」

「不吉なこと、言うんじゃねえ！」

ミリアーナの血迷ったひとり言に即答したのは、トウザである。

「俺の女版って、お袋じゃねーか！ んな風に育ててたまるか！」

「ほえ？」

ミリアーナは知らないが、トウザは亡き母にそっくりなのだ。

その事情を知らぬまま、ミリアーナはとっさに女体化したトウザを想像しようとして——挫折した。

「だいたい、親父は娘にお袋の名前を付けようとしやがるしよ。別の名前付けるのに、どんだけ苦労したことか——」

トウザは、血を吐くように叫ぶ。

「嫁、こいつの母親は、まんま女版のトウザだったぞ」

『ハヤサの鬼姫』オクタヴィアと面識のあるマティサが言い添えた。

「……想像を絶する女丈夫ですわ」

トウザの容姿に、女性的なところなどない。野性的な男らしい顔立ちで、大柄な体は筋肉質で雄々しい。

これがそのまま女性になったら——
ミリアーナは再びそれを想像しようとして、やはり挫折した。

「生まれたばかりでまだよくわからんが、今のところ、母親に似てるころのほうが多かったです。俺やお袋には似ていない」

「そういえば、娘の名前を聞いてなかったな。なんと付けたんだ？」
マティサの問いかけに、トウザは答える。

「オルディーヌだ。母方の曾祖母の名前でよ、オルって呼んでるぜ」
オクタヴィアの母の名前を付けることで、ナリスは納得したらしい。

「そうそう、土産があったんだ。この屋敷の厨房に運ばせといたぜ。のりとかつおぶしと魚だ。しかし、あれだな。まさか内陸に新鮮な海の魚を持ち込めるとは思わなかったぜ」

「冷蔵庫、活用してくださっているようで何よりですわ」

ミリアーナは表情を和らげた。

ハヤサには、保冷庫がわりの冷蔵庫を販売している。断熱性のある箱に、氷の精霊石を敷き詰められたものである。精霊石とは、魔力を宿した石のこと。本物の氷とは違って溶ける心配はなく、魔力が尽きるまで冷気を発し続ける。

ミリアーナが前世にいた世界では、生魚をすぐ氷漬けにして鮮度を保っていた。

ハヤサから運んできた以上、さすがに刺身は無理だろうが、加熱調理すれば食べられるだろう。

トウザは、ミリアーナに向かって言葉を続ける。

「いいな、あの箱。鮮度が落ちにくくなる。追加注文できるか？」

ミリアーナはにっこり笑って言った。

「業務用の特大サイズ、ですわよね？ 特注になりますのでお時間をいただきますけど、それでよろしければ。おいくつ必要ですか？」

「とりあえず、二十。この前と同じ値段でいいか？」

「はい。順次生産にかかりますが、先に用意できた分は、どちらにお持ちします？」

「王都のハヤサ大使館に持ってつてくれりゃいい。支払いはどうする？ 全額前払いでもいいぜ」
全額前払いとは、ずいぶん信用されたものである。ミリアーナは静かに首を横に振った。

「いえ、品物と引き換えで構いませんわ」

ダイテス側としても、ハヤサとの取引は大事にしたい。今のところは、商品を受け渡す際に支払ってもらう形で問題はない。

「それにしても、のりはやっぱ湿気るのが問題だな。早めに食うか、食う時にあぶってくれや。つくだにのほうは問題ねえけどよ。かつおぶし、あれは結構いけるな」

トウザの言葉に、ミリアーナは目を見開く。

「あら？ もしかして、ハヤサのほうでも食べるようになったんですか？」

「おお、試しに食ってみたら美味かったんでな。ありゃあ、いいぜ」

消費が増えれば、生産も伸びる。ハヤサに日本食が根づこうとしていた。ミリアーナはにんまりと笑う。

「いいことですわ」

和やかに商売の話をするミリアーナとトウザを眺めながら、マティサは溜息をついた。トウザの娘を息子ティスの嫁として迎えることには、躊躇いがある。なぜなら、オウミの王太子ジュリアスとハヤサの第二王女サヨが結婚したばかりだからだ。

オウミとハヤサの関係を深めるため、ジュリアスとサヨは婚姻する運びとなった。しかしオウミの一部の人間には、別の目論見もあった。

廃嫡され、北の辺境の地に追いやられる形となったマティサだったが、公爵家を継いで軍に復帰した。つまり、表舞台に戻ってきたわけである。王級「加護持ち」のマティサが表舞台に戻ってくることで、ジュリアス王太子の地位が揺らぐと考える者たちもいる。彼らは、ジュリアスとサヨの婚姻により『虐殺人形』ナリスと『ハヤサの鬼』トウザという後ろ盾を得られ、マティサへの牽制になると思っているのだ。そのため、今ここでダイテス——マティサとハヤサが接近すると、ハヤサがジュリアスを見限ったと捉えられる可能性もある。

また、マティサの懸念はそれだけではない。マティサとジュリアスの実母リサーナが、ハヤサの姫君サヨをどう扱うかも不安だ。

リサーナは王級「加護持ち」を忌み嫌っており、身内に「加護持ち」を持つサヨの婚姻にも反対していた。母の反対を退け、婚姻を決めたのはジュリアスである。

元より、嫁と姑はいがみ合うものだという。

ジュリアスを溺愛するリサーナのことだ。サヨに限らず誰が嫁であっても虐めるに違いない。

しかしサヨを冷遇すれば、そのままハヤサとの戦に繋がるだろう。

子煩悩である『虐殺人形』ナリスと、弟妹を可愛がる『ハヤサの鬼』トウザ。この二人が先陣を切って攻めてきてもおかしくない。

ハヤサとオウミを比較すれば、規模だけならオウミのほうが上だ。しかし、それを引っくり返す存在こそ、二人の王級「加護持ち」である。

総力戦で、対抗できるかどうか。いや、トウザは止められてもナリスは止められない。オウミ軍の全滅さえ覚悟しなければならぬだろう。

ハヤサとは争いたくない。

オウミのユティアス王とジュリアスも、それはわかっているはずだ。何かあれば、二人がとりなすとは思うが——

「面倒事を持ち込みやがって」
マティサは舌打ちした。

ハヤサは建国八年の若い国で、その前身はモグワールという歴史ある国家だった。

しかし、モグワール最後の王は『ハヤサの鬼姫』オクタヴィアを暗殺し、その夫『虐殺人形』ナリスの怒りを買う。ナリスはモグワールの王弟であったが、妻を奪った王家の人々を自らの手で葬った。こうしてハヤサが建国されたのだ。

以降、ハヤサは交易に力を入れ、モグワール時代から付き合いのあった国とも取引を続けてきた。しかし、中には反発を示す国もある。

東の海洋国フィールも、ハヤサに反発した国の一つだ。

フィールは、東の交易の要とも言える国。そしてフィールは、モグワールに稼がせてもらっていた。すなわち、モグワールは一種の『カモ』だったのだ。

予算など気にもとめず贅沢品を買いあさっていたモグワールは、フィールにツケや借金がかなりあった。

ナリスがモグワールを乗っ取ったのなら、フィールは新たな国王に借金の清算を求めることができただろう。しかし『ハヤサ』という新しい国に、モグワールの負債を返す義理などない。

事実、モグワールの負債は回収不可能になった。

フィール国王がふてくされる一方、別の考え方をする者もいた。フィールの王太子、ワイズである。

モグワールを前身とするハヤサには良港があり、大陸中央の起点ともなりうる。商売をするには、絶好の場所だ。

ハヤサ以外にも条件を満たす国はあるが、東の国カイナンは地形が峻険で、大きな港が作れない。ナグモはカイナンの属国なので、契約の際、カイナンの横槍が入るだろう。また、西の海洋国ランカナもあまり良い商売相手ではない。目先の利に走りすぎて、長期的な展望がない。

では、新興国ハヤサはどうか。これは、国王次第だろう。

王太子ワイズはハヤサの情報を集めさせたが、国王ナリスの手腕は確かなものだった。内政に力を入れて産業を発達させ、知恵と言葉で他国を翻弄する。

新興国として旧モグワールの借金を踏み倒したのは、この際仕方ない。それを除いても、ちょっとばかり敵には回したくない人間である。

ハヤサ建国から二年が経った頃、ワイズは意を決してナリスに会った。

ナリスは想像以上に美しかった。その美貌に最初は気圧されたものの、ワイズは目的を果たすことに成功。ハヤサと国交を結び、縁組を成立させた。

ワイズは、ハヤサを『買い』だと考えた。縁を繋いでおいて、損のない相手だと。

そのため、モグワールの時のように相手をカモにするような付き合い方ではなく、真面目に良い

付き合いをする他ないと直感した。

そして、それは正しかった。

ハヤサはわずか四年でモグワールを凌ぐほどに成長し、さらなる発展を遂げた。建国当初に抱いていたハヤサへの反発も、今のフィールにはない。これには、婚姻が大きく関わっている。

ハヤサと和平を結ぶべく、ワイズはナリスに親書を送り、ハヤサの姫君との縁談を申し入れた。それは受け入れられ、やってきたのがタヴィナである。

妻となったタヴィナは、この世のものとは思えぬほど美しかった。ハヤサのナリスもまた、絶世の美貌を持つことで有名だ。その父に似ていると聞いていたためある程度は想像していたのだが、あまりの美貌に驚き、ワイズはタヴィナを前に固まってしまった。

もつとも、タヴィナの美貌に我を忘れたのはワイズ一人ではない。父王をはじめ、ハヤサに敵愾心を抱いていた一派さえ、魂を抜かれたような顔をしていた。

タヴィナに対しての反感は、その時点で消えた。

本人に嫌がらせをする者など、もちろんいない。

タヴィナを披露する際には城下を一巡りしたのだが——民衆もまた、彼女の美しさに魂を抜かれてしまったらしい。ワイズは、静まり返るパレードというものはじめて見た。

タヴィナとの婚姻前、ワイズには他国や国内貴族より縁談話がたびたび持ちかけられていた。し

かし婚姻後、彼に女性を差し出す者はいなくなった。

フィールでは王族が側室を持つのも珍しくないのだが、ワイズの側室となった場合、正室のタヴィナと寵を競うことになる。つまり、皆、戦う前から勝負を諦めたようだ。

おかげで、ワイズの妻はいまだにタヴィナ一人。

とはいえ、ワイズはそれについて不満を抱いていない。

着飾らせ、公の場に連れていくだけで、タヴィナはフィールの経済に貢献してくれる。彼女が身にまとった衣装や装飾品に憧れる者は多い。他国の貴族はタヴィナと同じ衣装や装飾品を求め、フィールの経済は潤った。

美しく賢い妻は、跡取りもきちんと生んでくれて、期待以上の存在となった。

ワイズは、政略結婚という賭けに勝ったのだ。

そして彼はさらなる縁を求め、このたび、フィールからハヤサにやってきた。

青い空に、白い帆が翻る。

活気あふれる港町を前に、ワイズは笑みを浮かべた。

ハヤサの王宮は、元モグワールの王宮である。

平屋建ての宮はとて広く、すぐ近くには港があり海が望める。

王宮を訪ねたワイズは、ナリス王のもとに通された。

「遠路はるばるよう来たのう。ゆっくりしてゆくがよいぞ」

義父は非常に若々しく、妖艶な笑みを浮かべる。

射干玉の黒髪に、黒曜石の瞳。整った人形のような顔は、ワイズの妻によく似ていた。

「ご無沙汰しております、義父上。何分ハヤサは遠方で、船を擁する我々として、思うに任せません」

ワイズはそう挨拶をした後、臣下に合図を送り、用意していたものを持ってこさせた。

布に包まれたその荷を自らほどき、ナリスに見えるよう差し出す。

それは、ナリスと同じ顔をした美女と、可愛らしい幼児二人の描かれた姿絵であった。

ナリスの長女タヴィナは、布地をたっぷり使ったフィール風の衣装をまとい、黒髪を結び上げている。彼女の傍に描かれている幼児は、ワイズの息子と娘。すなわち、ナリスの孫である。

「さして有名な画家ではありませんが、国を出るのにあわせて描かせました。妻と子供たちの絵です。義父上にと思っています」

「これは何よりの贈りものじゃのう」

ナリスは相好を崩して絵画を受け取った。

フィールへ嫁に行かせたきり、会っていない娘の絵である。さらには、まだ見ぬ孫の姿も描かれている。ナリスにとつてこの姿絵は、千金に値した。

実の親兄弟を皆殺しにしたナリスだが、妻の親戚や子どもたちには甘い。

策を巡らせ、人を陥れる策略家の顔と、家族にあふれんばかりの愛情を注ぐ顔。ワイズは、ナリスの二面性を心得ていた。

「土産の一つでございます。他にもございますが、どうぞおおさめください」

義父の機嫌を取ったワイズは、ここで本題を切り出すことにした。

「妻から聞きましたが、トウザ殿にお子ができたらいいですね。もう生まれておられるでしょうか？」

タヴィナに届いた便り。そこには、ハヤサの王太子トウザに子供ができたという記述があった。

これこそ、ワイズがハヤサに足を運んだ理由である。タヴィナは、男女両方の子を生んでくれた。

トウザの子が男でも女でも、ワイズの子と縁組することは可能だ。

ワイズの問いかけに、ナリスは含みのある笑みを浮かべた。

「生まれたぞえ。かわゆい女子でう。内孫ははじめてゆえ、かわゆうてならん」

「それはおめでとうございます。トウザ殿下はいずこに？ 是非祝いの言葉を伝えたいのですが」

すると、ナリスが口元を扇で覆う。

「あれは今オウミに行っておるえ。ここだけの話だが、娘の婚約を取りつけにのう」

「な！」

しまった、先を越された——ワイズは心の中で舌打ちする。

「お子は生まれたばかりでありますように。オウミは隣国でしたな。王族に釣り合う年の者などお

られましたかな？」

「ほう、ほう。さすがにフィールまでは、オウミの内情が届いておらぬと見えるのう」
扇の奥でナリスが笑う。

「トウザはの、生まれた女子をダイテス公爵家の嫡男に嫁がせたいと考えておる。これはハヤサの総意じゃ」

公爵家との縁談と聞き、ワイズは驚いた。

「ハヤサの総意ですか？ 公爵家との繋がりが？」

ナリスは頷いた。

「今のダイテス公爵はの、オウミのユティアス王の長子で、王級 “加護持ち” じゃ
ワイズは息を呑んだ。

「『黒の魔将軍』または『戦神の寵児』という名に聞き覚えはないかえ？ 弟思いゆえ、大人しゅう辺境に引っこんだが、あれはオウミの守護神じゃ。捨ててはおけぬ。味方に付けられるのなら、付けておくが上策。ましてダイテス領は、少々面白いところでのう。縁を結んでおくに限る」

王の長子で王級 “加護持ち” だというのに、王太子ではなく一公爵となった。

普通では考えられないことである。その長子が寵姫の生んだ子で、弟が正妃の子という場合なら、ありえるか――

いずれにせよ、ハヤサが味方に付けたいと思うほどの人物なので、頭は切れるのだろう。

「それは――面白そうですね」

興味を持ったワイズがそう答えると、ナリスは優雅に扇を振る。

「そうじゃのう。婿殿も一度会っておくとよいぞ。トウザの友じゃ。その意味、婿殿ならわかるであらう？」

ナリスが与えてくれた情報を、ワイズはすぐさま理解した。

トウザは勘が鋭い。

ろくでもない相手は、初対面で見抜く。そのトウザが好意を抱く相手であれば、性根も悪くないはずだ。

ならば、この機会を逃すわけにはいかない。

「それは是非とも。義父上、骨を折っていただけますか？」

ナリスは快く承知した。

「婿殿の頼みとあれば、我に否やはないぞえ。かわゆいタヴィナの婿殿じゃ」

しかし、ここでナリスは、あえていくつかの情報を与えなかった。扇の陰でナリスがほくそ笑んでいたことを、ワイズは知る由もなかった。

第二章 誇りと意地

エチルは、大陸中央における西の覇者である。大陸最強と謳われる王級「加護持ち」「無敗王」トウルが治める国だ。

トウルが兄王を討ち倒して王となった後、周辺の三国を併呑。これはいずれも、相手国から仕掛けられた戦だった。

そのうち二国の王は死んだが、一国の王はその罪を悔い、己の命と引き換えに国民への慈悲を乞うた。するとトウルは王の命を取らず、一貴族として臣下に下ることを許した。そして国の名はその貴族の名として残り、かつての王族は今なおトウルに仕えている。

また支配した国の住人と自国民の待遇に区別をつける王が多い中、トウルは併呑した国の人間とエチルの人間を分け隔てなく扱った。

トウルが『慈悲深き』と冠を付けて呼ばれる所以である。

絶えず他国に戦を仕掛けていた兄王とは違い、トウルは自ら戦を仕掛けない。西に戦が起きて他国より助けを求められた時には、自国の損得抜きに救援を送る。そして助けた国に、従属を強制することもなかった。

このように慈悲深いトウルに対し、国民は敬愛の念を寄せている。

トウールの養子であるルーファスも、義父を敬愛していた。それゆえ、義父を裏切るような真似だけは死んでもできないと常日頃から考えている。

その日、ルーファスのもとに他国の大使がやってきた。

他国からの客には、礼節を払わなければならない。とはいえ、耐えかねることもある。

大使の差し出した一枚の姿絵には、年若い姫君が描かれていた。こんなものを出してきたということは、目的は一つだろう。

大使は、薄く笑って切り出した。

「いかがですか。我が国の姫を娶っていただければ、我々はあなたの後ろ盾となりましょう」

今年二十二歳になったルーファスには、妻はおろか婚約者さえいない。

本来なら、他国の王族や国内の有力貴族がその座を巡って争うものだ。事実、かなりの数の縁談が持ちこまれているが、ルーファスにはいまだ女の影がない。

ルーファスは灰色の瞳で姿絵を一瞥し、大使に突っ返した。

「申し訳ありませんが、お断りいたします。姫君がどうということではなく、私はこのような話を受けられない立場です」

ルーファスは王太子という自身の立場に納得していなかった。

実父は国を大きくしたいという欲望のまま突き進み、頻繁に戦争をして国を疲弊させた愚王である。さらには色欲にも目を眩ませた。

トゥールが反旗を翻したのも、国と民のため——そしてトゥールは民に望まれて王となった。

当然その後継者は、トゥールの実子だと考えていた。しかしトゥールは何を思ったのか、兄王の遺児であるルーファスを養子に迎え、王太子に据えた。

その上、生涯独身で通すと宣言したのだ。

ルーファスの母はトゥールの婚約者だったが、兄王に力づくで召し上げられてしまった。元婚約者の血を引いたルーファスを、トゥールは大事にしている。

目の色こそエチル王家に多い灰色だが、淡い金髪も顔立ちも、ルーファスは母によく似ている。

それゆえにトゥールから優遇されていると、人々は陰で囁いているらしい。しかしルーファスにとって、そんな優遇は心苦しいだけだ。

トゥールの実子に王太子の座を譲るべく、ルーファスは何度も『生涯独身宣言』を撤回させようとした。

ルーファス自身も女を寄せつけず、その血を後世に残す気はないと宣言。

こうして義親子ともども、相手に宣言を撤回するよう言い合っていた。

しかし、このたびトゥールに実子が誕生した。

男であればよかったのだが、女兒である。残念だが、女兒でも王位は継げる。

ルーファスは義妹に地位を譲るつもりだった。

そうなれば、他国の後ろ盾など得ても邪魔なだけである。

この大使はルーファスに自国の姫を娶らせ、エチルの政治に口をはさむつもりなのだろう。なんとも迷惑な話だ。

姿絵を一瞥して話を断ったルーファスに、大使は眉を寄せた。

「なぜですか？ このお話は、あなた様の立場を慮つてのことですぞ。残念ながらあなた様は、窮地に立たされております。トゥール王に実子が生まれ、いつその地位を剥奪されてもおかしくありません。しかしながら、我が国の後ろ盾があれば、そのようなことはさせません」

大使の言葉に、ルーファスは顔をしかめる。むしろ剥奪こそがルーファスの望みなのだ。

しかし、大使はルーファスを唆すように続ける。

「穏便に地位を譲るだけで済むと思っておられますか？ あなた様に落ち度がなくとも、冤罪、暗殺——いくらでも術はございます。お命までも危ういかと」

不安を掻き立て、義父への反発を引き出そうとしているのだろう。

ルーファスは笑った。

「それが義父上の望みであるのなら——」

トゥールがルーファスの命を望むなら、いつでも差し出す覚悟はできている。前王である実父の所業を思えば、死を命じられることなど当然だ。

できれば義父の手で討つてほしいところだが、それは贅沢だろう。

義父の手の者か、あるいは別の暗殺者か——どちらかだ。

ルーファスの反応に、大使がたじろいだ。

『無敗王』殿があなた様を害することはないとお思いですか？ それは大きな間違いですぞ！

いくら慈悲深いと言われるお方でも、実子可愛さに血迷うこともございます」

大使の忠告は、完全に的を外している。

ルーファスは冷たく言い捨てた。

「あなたとは話ができませんようです。どうぞお引き取りを」



大使を追い返したルーファスは先触れを出して、奥宮のある部屋に向かった。

表と切り離された奥宮は、王族のプライベートな空間である。

内装は落ち着いた雰囲気、小花などが飾られ、柔らかな空気が満ちている。それもこれも、奥宮に新たな住人がやってきたからだ。

義父の生涯独身宣言を撤回させた女性は、身分を持たない人だった。それゆえに表には出ず、奥宮でひっそりと暮らしている。

先触れのおかげが、部屋にはすんなりと通された。

「ようこそお越しくさしました。ルーファス殿下」

少しばかりやつれたが、『傾国』と謳われたヒナキの美貌はまだまだ衰えない。そして母となったためか、以前より柔らかな印象を受けた。

出迎えたヒナキに、ルーファスは微笑んだ。

ヒナキはいわゆるエチルの「影」の長だったが、トゥールの寵を得て子を生んだ。

どこかの貴族の養女ということにしてしまえば表に出てもよいのだが、本人はそれを頑なに拒否している。

寵を得て子をなしたことに満足しており、それ以上は望まないと、奥宮に入ることさえ拒んだ。

子には母が必要だと説得し、奥宮での生活だけは了承してもらったのだ。

義父の孤独を癒してくれた人だと思えば、ルーファスの対応も丁寧になる。

「お加減はいかがでしょう？ 障りがあるようでしたら、楽になさってください」

「体は大丈夫でございます。お気づかい、ありがとうございます」

ヒナキの顔色を見て、障りはなさそうだと安心する。

「お子様はどこに？ 抱いてもかまいませんでしょうか？」

ルーファスは、自分の生母——トゥールの元婚約者と同じ名を付けられた義妹に会いに来たのだ。

この義妹セレスは、血縁上の従妹にあたる。

「もちろんでございます。どうぞこちらに」

ヒナキは快く応じたが、部屋にいた侍女の一人が不安げに声をかけた。

「よろしいのですか？」

その声には、ルーファスが赤ん坊を害するのではないかという懸念が含まれていた。しかしヒナキは、侍女の声が聞こえなかったかのように、寝台から子を抱き上げた。

「首はすわってきましたので、抱きやすくなったと思いますわ」

柔らかな服を着た赤子がルーファスの腕に渡される。

ふわりと漂う甘い匂い。銀色の髪に灰色の瞳。顔立ちはまだはつきりしないが、両親のどちらに似ても美しくなるだろう。

赤ん坊はとも柔らかくて、切なくなるほど軽い。きゅっと握った手の小ささに、ルーファスは顔を綻はせた。

「ああ……可愛らしい。早く大きくなってくださいね」

ルーファスは小さな義妹にそっと囁く。健やかに育つことを願って――

「ありがとうございます。寝台に寝かせればいいのですか？」

「いえ、わたしが」

ヒナキがセレスを受け取る。

ルーファスはもう一度礼を述べて、部屋を後にした。

ルーファスの足音が遠ざかっていくのを確認し、ヒナキは我が子を寝台に下ろした。

生まれてまだ間もない娘は、あまり泣かない。ぐずらずに眠るし、先んじて世話をすれば機嫌を損ねることもない。

寝台に寝かされたセレスは、すぐに目を閉じて寝てしまった。

ヒナキは一度微笑んでから、顔を上げる。その視線の先には、ヒナキとルーファスのやり取りに口出した侍女の姿があった。

ヒナキはその侍女に言い渡す。

「お前、すぐに奥宮から出ていきなさい」

侍女は動転して、ヒナキに尋ねる。

「お部屋様、なぜでございますか!？」

「なぜ？ そんなこともわからないのか。お前はルーファス様に許されざる無礼を働いた。そのよ
うな者を奥宮に――いや、このエチルの王城に置いておくわけにはいかない」

この侍女は、ヒナキが奥宮に入った後に押しつけられた者だ。

トゥールの寵姫となったヒナキのもとには、侍女や護衛といった名目で、各貴族の息のかかった者が送りつけられる。

すべて断りたいところだが、政治的なバランスを考えると、無下にするわけにもいかない。一部

の者はこうして受け入れたが——王太子を傷つける可能性のある者など、置いておくわけにはいかなかった。

ヒナキの忠誠はトゥールに捧げられている。

トゥールの意志に逆らう者をヒナキは許さない。

侍女は、その場に這いつくばって許しを乞うた。

「お許しください、お部屋様。ですが、あの方は養子でいらっしやる。いつ何時、姫様に害意を抱くかわかりません。あの方を姫様に近づけてはなりません。何とぞ、何とぞそれだけは」

「まだ言うか！ 慮外者が！」

怒声を上げたヒナキは、侍女の髪を掴んで顔を上げさせた。

「ルーファス様は、我が君が決められた王太子であらせられる！ 我らは、我が君に次ぐ忠誠をルーファス様に捧げなければならぬのだ！ それを貶めるか！」

ヒナキは侍女の頬を張り、力任せに部屋から放り出した。

妊娠と出産で体力が落ちているとはいえ、エチルの影の長だったヒナキである。素人の侍女一人、どうにでもなる。

ヒナキは室内の侍女たちに視線を戻した。

青ざめて震えている者、当然という顔をして控えている者——侍女たちは、このどちらかの反応を見せた。

ヒナキは青ざめている侍女に声をかける。

「顔色が悪いようだ。下がって休みなさい」

「は、はい。お部屋様」

顔色を悪くした侍女たちは、いつせいに部屋を出て扉を閉めた。

ヒナキは息を吐き、長椅子に腰を下ろす。

「お疲れさまです」

「あの者どもはいかがいたしましたでしょうか？ 片づけますか？」

部屋に残っている侍女たちは、すべて「影」の者たちである。

元部下の物騒な進言に、ヒナキは憂い顔で前髪を掻き上げた。

「そういうわけにもいかんだろう。あれらの後ろ盾がうるさい。しばらくは静観するが——ルーファス様に無礼があれば、すぐにでも叩き出せ」

「御意」

侍女たちは頭を下げた。

「まったく、厄介な……」

貴族たちは、トゥールへの忠誠の証として、ヒナキに親族を送り込んでくる。それを思えば無下にはできないが——だからこそ面倒だった。

ヒナキが頭を悩ませているのは、誰を信用していいのかわからないということ。